

兵庫の眼玉

野村胡堂

一

「八、花は散り際つて言うが、人出の少くなつた向島を、花吹雪を浴びて歩くのも悪くねえな」

銭形平次は如何にも好い心持そうでした。

「悪いとは言いませんがね、親分」

「何だ、文句があるのかえ」

「こう、金竜山の鐘が陰いんに籠こもつてポーンと鳴ると、五臓六腑ぞうぶへ沁

み渡りませぬ」

かいだんぼなし

「怪談噺てえ道具立じやないよ。見ろ、もう月が出るじやないか」

「へッ、へッ、真つ直ぐに申上げると、腹が減ったんで」

ガラツ八の八五郎は、長い顎を撫でました。涎よだれを揉み上げると
言った恰好です。

「もう食う話か、先刻さっきあんなに詰め込んだ団子はどこへ入ったんだ」
だ」

「それが解らないから不思議で、——何しろ竹屋の渡しから水神すいじん
まで三遍半歩いちゃ、大概の団子腹がたまりませんよ」

「泣くなよ八、風流気のない野郎だ」

錢形の平次と子分の八五郎は、こんな無駄を言いながら、向島の土手を歩いておりました。

昼のうちは、落花を惜しむ人の群で、相当以上に賑いますが、日が暮れると、グツと疎まばらになって、平次と八五郎の太平楽さまたを妨げる酔っ払いもありません。

丁度牛の御前のあたりへ来た時。

バタバタと後から足音がして、除け損ねた八五郎の身体へドンと突き当りました。

「危ねえ、後から突き当る奴もねえものだ。何をあわてるんだ」
「御免下さいまし」

振り返ったガラツ八の袖の下を搔潜かいくぐりざま、ト、ト、トと前へ、物に驚いた美しい鳥のように駆け抜けたのは、紛れもなく若い女です。

「どっこい、待ちねえ。胡乱うろんな奴だ」

後ろから伸びた八五郎の手は、その帯際を無手むずと掴みました。

「急ぐ者で御座います。お許しを願います」

女は花見衣しころもの袖に顔を埋めて、堤どての夕闇に消えも入りそうでした。

「懐中物の無事な顔を見ないうちは、うっかり勘弁するものか」
八五郎は遊んでいる片手を働かせて、内懐から腹掛けの井から、

犢鼻褌ふんどしの三つまで搜みっております。女巾着切と思込んだのです。

「八、何てえ事をするんだ。見れば御武家方に御奉公している御女中のようだ。無礼があつてはなるまい」

平次は見兼ねて肩を叩きました。

「へエ、巾着切じゃありませんかえ。花時の向島土手で、不意に後ろから突当るのは、巾着切と決つたようなものだが」

ガラツ八は漸く手を放します。

「飛んでもねえ野郎だ。——お女中、勘弁してやって下さい。こんな解らねえ野郎でも、役目があるんだから」

「ハイ、イエ」

女はひどく恐縮して、二人へ弁解いいわけをするともなく、顔の袖を取りました。堤どての掛行燈は少し遠過ぎますが、丁度田圃の上へ出た月が、その素晴らしい容貌きりようを、惜しみなく照し出します。

「お急ぎのようだ、構わず行きなさるが宜い。まだ花見の往来があるから、物騒なことはあるまい」

「有難う存じます。船がツイ竹屋の渡しの手前に待っておりますから」

「それじゃ、ほんの一と丁場だ、——送って上げるのも気障きざんだ。

酔っ払いか何かに絡からみ付かれたら、大きな声を出しなさるが宜い」

平次は月明りのまだよく届かない橋の下陰を透しながら、行届

いた注意を与えております。

「銭形平次親分という荒神様こうじんさまが附いているんだ、——とな」

「余計な事を言うな、馬鹿野郎」

「へエ」

ガラツ八の凹へこむ顔を見て、女は始めて微笑みましたが、そのま
ま物優しく小腰を屈めると、踵きびすを返して竹屋の流しの方へ急ぎ
ます。

兵庫の眼玉



©2017 萩 柚月

土手の人足は至って疎らですが、川面かわもは夜桜見物の船が隙もなく往来し、絃歌と歓声が春の波を湧き立たせるばかりです。

「何か間違いがあつたらしいな」

平次は三囲みめぐりの前に来た時、堤どての下を覗きました。そこに繫いだ一艘の屋根船の中には、上を下したへの大騒動が始まっているのです。堤の上からは若い武家が一人、それを覗いているのを見逃す平次ではありません。

「行って見ましようか、親分」

ガラツ八の職業意識は燃え上がりました。

「放って置くが宜い、武家の遊山ゆさんぶね船だ。——町方の岡っ引が口を

出す場所じゃねえ。第一後がうるさいよ。それよりは堤どての上から
一生懸命、船の様子を見ている、若い武家の人相を覚えて置くが
宜い」

平次はそのままそっぽを向いて通り過ぎます。

二

丁度その時、堤の下の屋根船には、大変な騒ぎが起っておりま
した。

駒形に屋敷を持っている、旗本大村兵庫ひょうご。三千五百石の大身で

すが、若くて無役で無類の放埒、この日は柳橋から花見船を仕立てさせ、用人村川菊内、愛妾のお町、あいしゅう中間の勝造、ちゅうげんそれに庭掃除の親爺三吉をお爛番に、芸妓大小三人、ほうかん幫間一人を伴れて、昼から漕ぎ出させ、水神まで一と往復した上、夕景から三囲の前に着けさせて、存分に夜桜の散るのを眺め、月が明るくなつてから帰ろうという計画を立てました。
プログラム

日が暮れる前、召使という名義になっている愛妾のお町は、長命寺境内に叔母がいるから、一寸挨拶だけでもして来たいと言ひ出し、相当むずかる主人の大村兵庫をなだめて船から上り、お爛番の三吉は、用意の酒を酔っ払いの幫間にこぼされたので、口を

開けたばかりの灘なだの銘酒めいしゅの補充ほじゅうに、一と走り駒形まで帰りました。船の中は、酔ってないのは二人の船頭だけ、七輪は中間の勝造が預って、たそがれと共に、際限のない乱酔に落ちて行きそうでした。

しばらく濃くなる夕闇——それも存分あかりに灯が入ると、飲んで騒ぐ分には、何の煩わずらいもありません。

大村兵庫、この上もなく満足でした。喰らい肥った三十二歳の巨体を、傍若無人に芸妓の膝もたに凭せ、左手に挙げた朱塗の大盃を半分乾すと、

「ホーツ」

と息を継ぎます。

ひきよう

「殿様、卑怯^{ひきよう}千万。敵に後ろを見せるといふ法は御座いません。グツと、グツとお乾し遊ばして。お流れは、へッ、この私が頂戴仕ります」

幫間が中腰になつて、泳ぐような手付きをするのでした。

「武士に向つて卑怯、——とは聞捨てにならんぞ。卑怯^{おくびよう}や臆病で

休んでいるのではない。酒が切れて、お爛番の勝造が眼を白黒させておるではないか——三吉はまだ戻らぬか」

「もう、追っつけ戻りましょう」

用人の村川菊内は少し苦々しいのを我慢して、精一杯^{あいづち}合槌を

打っております。この辺で御意に逆らうと、いきなり「——仲へ行けッ——」と言い出さないものでもありません。

「大分手間取るようだな。ところで、月はまだ出ぬか、真暗では花見も一向興がない」

「土手の上は月が射しております。今出たばかりで御座いませう」

勝造は艦ともへ立上って、小手をかざしました。

その時、

「あッ」

主人の大村兵庫、いきなり盃を投げ出して俯向いたのです。

「どうなさいました、殿様」

芸妓、幫間たいこの騒いだのも無理はありません。大村兵庫の左の眼ようきゆうに楊弓の矢が真っ直ぐに突立って、血潮は滾々こんこんとして頬から襟へ滴っているではありませんか。

船の中は煮えくり返る様な騒ぎですが、誰もどうする事も出来ません。その中で一番落着いているのは、眼を射られた本人の大村兵庫でした。さすがは三千五百石を喰はむ旗本だけに、気が落ち着くと、自分で矢を抜き取り、有合せの布きれを集めて、キリキリと繃帯ほうたいはしましたが、流るる血は、潮時と見えてなかなか止りませぬ。長さ九寸、朴の木で作ったヒヨロヒヨロの矢ですから、他の

場所に当たつたんでは、たいした業わざもしなかつたでしょうが、眼玉を射ただけに、これは厄介です。

「この辺に外科はないか」

それでも村川菊内、一番先に医者いしやの事に気がつきました。

「向島の土手じゃ、医者いしやがありません。本所へ行かなきゃア」

これは勝造です。

「本所へ行く位なら、向う岸へ引返した方が宜かろう。少しでも御屋敷へ近く行きたい」

村川菊内の言葉はもつともでした。二人の船頭はそれを聞くと、堤つゝみの下の杭くいに繋といだともづなを解といて、もう艀ふねを押す支度をして居りま

す。

「あつ、待って下さい」

愛妾お町はこの時、昇ったばかりの月を背に受けて、堤どてを下つて来たのでした。

「早く、お町さん、——殿様がお怪我をなすつた」

「えッ」

勝造の言葉は、お町にとって恐ろしい打撃だげきだったらしく、暫らく船に乗るのも忘れて堤どての中腹に立ちすくみました。

「どうなすつた。お町さん」

「本当にお怪我？ 人にどうかされたのではない？ 勝造さん」

「楊弓で眼を射られなすったのさ。さア、船を出すぞ」

酒を取りに駒形へ帰った三吉を待っておられません。そのまま船を漕ぎ出して、中流へ五六間とも行かないうちに――。

「おい、その船待ってくれ」

浅草の方から小舟でやって来た三吉。摺れ違いざま、川の中で舷ふなばたを付けて、こっちの船に飛乗りました。

「三吉か、――もう酒は要らねえよ」

と勝造。

「どうしたんだ。勝兄あにい哥」

三吉は三升樽をブラ下げて、艚ともに踞しゃがみました。五十六七、すつ

かり月代が色付いて、鼻も眼も口も萎びた、ひな剽軽な感じのする親爺です。ひょうきん

三

翌日用人の村川菊内、神田の平次を訪ねました。

「ざつとこう言うわけだ。おかみ公儀へは遠乗りの途中暴れ馬が殿を乗

せたまま雑木林に飛込み、木の枝で眼を突かれた——と届出てい

るが、町人の玩もてあそぶ楊弓の矢で眼を一つ潰されては、何としても諦

らめられない。意趣か、悪戯か知らぬが、入費はいかほど嵩かさもう

と苦しゅうない。是ぜが非でも曲者を探し出し、主君おかみの手で成敗したいという仰せだ。かようなことは素人に手の付けようなく、江戸一番の御用聞と聞いて参ったわけだ。何とか引受けてはくれまいか、平次殿」

折入つての頼みです。四十そこそこ、まだ用人摺れのする年ではありませんが、主人大村兵庫の脂切あぶらぎつたのと違って、ひどく気の弱そうな菊内は、御用聞風情の前に揉手もみでをしているのでした。

「御気の毒様ですが、私の手におえそうも御座いません。そればかりは御勘弁を願います、村川様」

平次は日頃になく尻込みをしております。

「それは又、どう言うわけだ」

「第一、御武家方の紛糾ごんきゅうは畠はたけ違いで御座います」

「それも承知だが、役目の表でする仕事ではない。公儀筋おかみすじへ聞えてはこちらにも迷惑、内々で探つて貰えば宜いのだが——」

「——」

「折入つての頼みだが、平次殿」

「まあお手をお上げ下さい。御武家に拝まれちゃ私は逃出しでもしなきゃアなりません」

「こう言っただけでは疑念があるかも知れない——序ついでに言つて仕舞いましょう——実はな平次殿、私がここへ参つたのは少しば

かり仔細のある事だ」

「へエ——」

「主人が何と仰しゃらうと暗闇くらやみの恥を明るみへ出したくはないが、堤の上から楊弓を射た疑いが、騒ぎの直ぐ後で船へ帰った御女中のお町という者に懸って、昨夜から恐ろしい折檻せっかんを受けているのじゃよ」

「へエ——」

平次は後ろに控えたガラツ八と顔を見合せました。

「お町は主人の御寵愛の深い女で、そんな事をする筈はないと思うが、困ったことに、いろいろの証拠しょうこがある」

「――」

「主人は眼の傷の手当をしながら苦痛を忍んでお町の折檻だ――
――ところでそのお町という女中が神田の銭形平次親分を呼んで
下さい。あの方は何もかも御存じだから、とこう言うのだ」

「へエ」

平次は驚きましたが、それよりガラツ八はたまりかねて、平次
の後ろから袖を引いております。昨夜向島の堤でガラツ八に突
当ったのは、そのお町と言う女でしょう。

「旦那、よく解りました。いかにもお邸へ参りましょう」

「えっ、乗出してくれる、――それは有難い」

「ついてはいろいろ承^{うけたまわ}りたいことも御座いますが」

「何なと訊くが宜い」

村川菊内、すっかり喜んでしまいました。

「第一に、殿様に奥方はおありでしような」

「お喜^き佐^さ様と言われる、三十七歳、お歳上だが、貞^{てい}淑^{しゆく}の誉^{たか}高い方^{かた}じゃ」

「お里方は？」

「西久保町の矢吹様、以前は歴^{れつき}とした直参^{ちくさん}じゃが——」

「御当主は？」

「御家族と申しては御舎弟^{けんのおすけ}狷^{けん}之^の介^{すけ}様たったお一人。まだ部屋住み

で、大村様御邸に掛り人で在られる」

矢吹家が微禄していることは、言外の意味でよく解ります。

「殿様を怨む者のお心当りは御座いませんか」

「無いと申されぬが、さて、差当り思い出さぬが——」

これではなかなか埒があきません。

四

駒形の大村邸に行った平次とガラツ八は、大変な情景シーンを見せられてしまいました。

通されたのは女中部屋の隣の大納戸。

若い女が一人、ながじゅぼん長襦袢一枚に剥むかれて、キリキリと縛り上げられた儘、畳の上に崩折れていたのです。

側に立っているのは主人の大村兵庫。半面を白布で巻いて、弓の折を杖に、苦痛と憤怒に、火のような息を吐いております。

「神田の平次を召連れて参りました」

村川菊内が声を掛けると、

「お、平次と言うか、御苦勞であつた。——飛んだ目に逢つての

う、——医者は動いてはならぬと言うが、一眼がんを潰した曲者が如何にも憎い。朝っから休んでは責め、責めては休みじゃ。この女

の強情が続くか、余の根わしこんが続くか——」

兵庫は顔を挙げて苦笑いしましたが、左の眼の痛みゆがに引釣って、脂切った顔は、見る影もなく歪みます。

「証拠があるように承りましたが」

平次は恐る恐る顔を挙げました。

「沢山ある、——第一に余が楊弓で眼を射られた時、この女は船にいなかった。大騒ぎの最中に堤どてを降りて来たのじゃ」

「それは」

平次は口を容れようとしたが、兵庫はそれに構わず続けます。

「いや、まだある。この女は船へ帰ると、余の傷よりも、楊弓ようきゆうの矢の心配をした、——眼から抜いて側へ置いた血だらけな矢を隠そうとしたのじゃ」

「殿様」

「一年越し世話をした女だ、分に過ぎた事ぶんもしてやってある。その恩も思わず、楊弓で主人の眼を射るとは、不都合と言おうか——」

大村兵庫はこみ上げてくる激怒に、前後を忘れて弓の折おれを振り上げました。

「殿様、暫くお待ち下さいまし」

「いや放って置け」

弓の折は大納戸の淀んだ風を切って、ピシリ、お町の肉ししむらうに鳴ります。

「あッ、ツ」

身体をねじ曲げて、齒を喰いしぼる女の苦悶くもんの姿は、どうかしたら、兵庫には快よいものに映るのかもわかりません。たった一つの眼が、苦痛のうちにも妖あやしく歓喜に輝きます。

「言えッ、女、言わぬか」

兵庫は続けざまに弓の折を振り冠るのでした。

埃り臭く、黴臭かびくさく淀んだ大納戸の空気は、美女の苦悩の声と折

檻に絞り出された汗に薰蒸して、言いようもなく不思議な匂いを醸し出すのを、平次は顔を反けて我慢しました。

「殿様、それは大変なお間違いで御座います。そのお町さんとか言う方は、昨夜月の出る頃から、船の中で騒ぎが始まるまで、私と一緒に堤どての上におりました。——突き当られた八五郎が何よりの証拠で御座います」

平次はそう言いながら、激情に駆られるように、兵庫と女の間割って入りました。

「それもこの女の口から聞いたよ。平次、一つは、その言葉が本当か嘘か、たしかめるために、お前を呼んだようなものだ」

「――」

「だがな、平次。楊弓を射たのはこの女ではない、この女の兄と言つて、時々邸へも出入りした男が怪しいのだ。浅五郎と言う遊び人だ。兄と言うのは、どうせ偽りいつわだろう」

「――」

殿様は妙に下情に通じております。

「その浅五郎が、昨日向島の土手の上をウロウロしているのを見た者があるのだ」

「誰方どなたが？」

平次はツイ釣られるともなく口を容れました。

「やぶきけんのすけ矢吹狷之介と言つてな、——奥の弟じゃ」

「えッ」

「奥の嫉妬しつとからない事を告げ口させる——と言つような疑いもあるだろうが、それは大丈夫だ。狷之介はまだ十九歳、一本気の男だ」

「それにしても殿様、堤とての上から、船の中の人々の眼玉を射るのは容易の腕前では御座いません。何の某たれがしと言う楊弓の名人でもなければ——」

「一応もつともだが、平次、まぐれ当りと言つ事がある」

「へエ」

平次も弱りました。三十そこそこで、放埒で、我儘で、悪く賢しもしもこくて、なまじ下々の事に通じていては、およそ扱いにくい典型的な殿様です。

「長命寺境内に叔母がいると言ったのも、大方嘘であろう。その証拠には、折檻されてから寺島新田と言い直している。恐らく土ど手の上をウロウロする浅五郎の姿を見かけ、それに逢うために口実を拵えて、一刻あまりも座を明けたに相違あるまい。楊弓で余の眼を射させたのも二人の談合ずくであろう——断つてそうでないと言うなら、浅五郎の住所を言えッ」

兵庫は又お町の頭の上へ弓の折れを振り上げました。

「殿様、——私は、何も存じません。——仰しやる通り浅五郎には逢いましたが、月の出る前に別れて、お船へ帰って参りました」
お町の言うのは本当でしょうが、兵庫は、

「偽いつわりを申すな、——浅五郎はどこにいる」

少しも責手をゆる緩めようとはしなかつたのです。

「存じません」

「しぶとい女だ。これでもか」

「あッ、ツ、ツ」

続け様に四つ五つ。

「菊内、代って打て。眼に響いて叶わぬ」

大村兵庫は弓の折れをポンと放って奥へ入りました。

五

この辺で少しばかり楊弓の事を説明して置かなければなりません。

言うまでもなく、これは寸法二尺八寸の極めて小さい弓で、初めは楊柳やなぎで作りましたが、後にはいろいろの貴い材料で作り、継つぎ弓ゆみにして金爛きんらんの袋などに入れて持って歩くようになりました。

矢は九寸が極きまり、羽にはいろいろの彩色いろいを施ほし、七間半の距離

から三寸の的を射るのが定法です。一表の矢数は二百本。その中五十本以上の当りには、いろいろの名前がついたもので、江戸時代の名人と言われた人には、百八十本以上百九十四五本当てる人は決して少くなく、稀まれには二百本『皆矢かいや』のこともあったと伝えております。

室町時代には高貴の方々の遊びであったのを、江戸時代になつてから、民間の遊戯となり、天保以後は品格が崩れて、美しい矢取女を呼物とする矢場に墮落だらくし、一種の魔窟になつてしまいました。

明治の矢場はその名残りで、明治十九年の取締りで廃絶しまし

だが、天保以前の矢場、即ち結改場けっかいぼはなかなか品格のあるものだったと言うことです。

楊弓の技わざに優れた人だったら、向島の土手の上から、船の中の人の目を射るのは、さして困難ではなかったでしょう、が同時に、それだけの腕を持った人は、広い江戸にも幾人もありません。

平次が、この曲者が女や子供ではない。特別な技があるだけに、反って直ぐ判るだろう——と思ったのは一応もつともです。

それはともかく——。

平次はお町の縄を解いて貰って、一応村川菊内に預け、それから、菊内の引合せで、大村邸内に住んでいるほとんどの人間に逢

いました。

最初に逢ったのは、奥方のお喜佐、——少し淋しい、平凡らしい婦人で、取立てて言う程の特色はありません。夫兵庫の放埒ほうらっを止める力もなく、蔭では泣いているといった型の、消極的な人柄ですが、こんなのが思いの外嫉妬しつとが強いのではあるまいか——と平次は考えておりました。

次に逢ったのは、その弟で矢吹狷之介、十九歳の大柄な青年ですが、元服はしても部屋住みで、西久保巴町の邸に帰って、やがて家禄を継ぐ事になっている——と村川菊内が説明してくれま

「親分」

この若い武家の顔を見ると、ガラツ八は驚いて平次の袖を引きました。あの晩、向島の堤どてで、船の騒ぎを覗ぞいていた人間に紛れもなかったのです。

「平次、お前の腕前はたいしたものだと言うな、何分頼むぞ。曲者は間違いもなくあの浅五郎の奴だ。お町も共謀ぐもだろう、——浅五郎が船を追っかけて、向島の堤どてを往つたり来たりしていたのを、この私が確かに見たんだから間違いはあるまい」

狷之介は肩などを怒らしながら、こんな事を言います。姉の敵と思っているのでしよう、お町に対してはかなりひどい反感を

持っています。そうです。

「その浅五郎を御覧になったのは、何刻頃でしょう」

と平次。

「ななつ申刻半かな」

「何か持っていましたか」

「さア、そこだよ。継弓つぎゆみにしても目に付く筈だが、どうも思い出

せない」

「貴方様は、殿様日頃の遊ばされようについて、どう考えていらっしゃいます」

平次は妙な事を訊ねました。

「打明けて言うとは面白くないな、——兄上もあんまりだ」

青年らしい一本気で、狷之介の顔にはサツと忿怒が一と刷毛はけ彩いろどられます。

平次はそんな事にして、中間の勝造を呼んで貰いました。三十七八の中間にしては少し年を取った渡り者で、随分摺れてはいるようですが、たいした悪人とは思われません。

「楊弓の巧い人間に心当りはないかえ」

平次が小当りに当ると、

「芝の五郎、未磧みせきなんてのは？」

それは当時聞えた名人です。

「そんなのじゃない。もう少し若いのでは誰だろう」

「浄瑠璃じょうるりの今井一中がうまいって言いますよ」

「少し見当違いだな」

今井一中は都一中のこと、これも旗本の眼玉とは縁の遠い名前です。

外に女中が三人、小侍が二人、門番が一人。

最後に逢ったのは、庭掃にわはきの三吉爺やでした。

「爺さん、お前はあの騒ぎを知らなかったんだね」

「土手にはろくな酒がないし、お邸には口を開けたばかりの菰冠こもかぶりがありますから、竹屋の渡しを渡って、駒形まで飛んで帰りま

したよ。三升ばかり取り分けて駆け出そうとすると吾妻橋手前で、幸い知ってる船頭衆に逢って、三囲前のお船まで小舟で送って貰みめぐりいました。船から船へ移ると、——今殿様がお怪我をなすつたという騒ぎでしょう。いや驚いたの驚かないの」

三吉親爺はそういつて首を振りました。年にしては少し老けていそうで、顔の皺にも、曇った眼にも、曲った腰にも、何となく労苦が刻まれているようです。出は、上総かずさの知行所、先代の庭掃きの株を譲られたままで、身分にも何の変哲もありません。

平次はそんな事にして引揚げることになりました。

「村川の旦那、隠さずに仰しゃって下さい。殿様はこれまで随分

罪を作ってお出ででしょうね」

これが、菊内の胸倉を掴むようにして訊ねた最後の問です。

「左様」

「御女中で、目が掛けられたのは、何人位あるでしょう」

質問は具体的です。

「お町が三人目で——」

「その前はどうなりました」

「申上げ悪いことだが、——一人は奥方の御憎しみを受けて自害じがいし、一人は不義の疑いがあつて御成敗を受けたよ」

「それが怪しいじゃ御座いませんか。村川の旦那、その身内の者

はどうしているんです。名前は？」

平次はせき込みました。

「自害したのはお小夜と言ってな。三年前に死んだ時は十八だった。両親には過分のお手当を下すった筈だ。下谷で安楽に暮しているよ」

「旦那は御存じで」

「よく知っている」

「もう一人の方は」

「おせいと言って二十だった。——これはもう十年にもなる」

「不義の相手はどうなりました」

「これも死んだよ。当時三十そこそこの好い男だった。又三郎と
いう遊び人でな、殿様に追われて袈裟掛けさがけに斬られたまま、大川へ
落込んでしまったよ」

「女の身寄は？」

「姉夫婦があつた。これも世間の口がうるさいから、多分の御手
当で、今以って繁昌している」

平次は少し胸が悪くなりました。こんな乱倫らんりんな旗本のために十
手捕縄の誇りまで犠牲にして、楊弓の曲者を捕えるのが、何だか
馬鹿馬鹿しいような気がしたのです。

六

「親分、どうする積りなんで」

それつきり十日ばかり、ろくに外へ出ようともしない平次を見ると、ガラツ八の方が気を揉み出しました。

「どうもしねえよ。寝溜ねだめだ」

「楊弓の下手人は」

「この十年の間、江戸で高名な楊弓の名人を書き上げて貰って、その道の者に一人一人身元を当らせたが、大村兵庫に怨みのあるような気のきかない人間は一人もない」

「浅五郎は？」

「お町の亭主かい、——丁半の心得はあるだろうが、楊弓などに縁があるものか」

「困ったね。親分」

「放って置くが宜い。俺はお上の御用を勤めていりや宜いんだ。お町が可哀想だと思つて乗り出したが、——入費は嵩かさんでも苦しゅうない——てな事を言う武家の紛々ごたごたなんか首を突つ込むのは嫌だ」

手の付けようがありません。平次は全くこんな事を考えていたのでしよう。

その時――。

「親分、――お願い」

外から案内も乞わずに転げ込んだ者があります。

刷毛先はけを散らして左へ曲げた、色の浅黒いあにい兄あにい哥ご。唐棧の胸をは

だけで、掛まもりけ守袋の紐と、腹帯に呑あいくちんだあいくちヒ首の脹らみを見せよう

と言った種類の人間です。

「何でえ。吃驚びっくりするじゃないか」

ガラツハは以ての外の顔を出しました。

「命かかわに拘かかわる大事だ。済まねえが銭形の親分に逢わしておくんなさ

い」

「平次は俺だが、——お前は」

八五郎の後ろから顔を出した平次を見ると、

「有難てえ。これで死んでも浮ばれると言うものだ。あつしは浅五郎と言うケチな野郎で——」

「おッ、お町の」

平次もガラッ八も驚きました。まさか、兵庫の眼を楊弓で射たと思われている、浅五郎が飛込んで来ようとは思わなかったのです。

「へッ、お町の阿魔あまがお世話になったそうで、あつしからもお礼を申します」

「そんな事はどうでも宜いが、何だつてここへ飛込んで来たんだ」と平次。

「あの狷之介けんのすけの野郎に捉まつて、駒形の大村屋敷に引立てられ、危なく笠の台が飛ぶところでしたよ」

浅五郎は自分の首を平手でピシヤリピシヤリと叩きました。

「――」

「庭先に引据えられて、殿様が一刀を引抜いて後ろへ立った時には驚きましたよ。なアに、命に糸目をつけるわけじゃねえ。この首が欲しきやア、熨斗のしを付けてくれてやるが、あの屋敷の中で死んだんじゃ無礼討で済まされるから、これほど詰らねえことはね

え

「――」

「計略を用いて、殿様の面つらへ砂を叩き付けると、塀を飛越えて逃出しました。いや駆けたの駆けねえの」

「何だって俺のところへ飛込んで来たんだ」

平次はまだ腑に落ちません。

「助けて貰おうてんじゃありません。この浅五郎に縄を付けて、奉行所へ突出して貰いたいんで――」

「何だと」

浅五郎は大変な事を言い出しました。

「大村兵庫の眼を、楊弓で射潰いつぶしたのは、この浅五郎に相違御座
いません。金づくで女房を奪られた怨みだ。どんな処刑おしおきでも受け
ますが、その代り、遊び人風情に女出入りで眼玉を射られた大村
兵庫も何とかして貰いましょう——とね、こう申上げる積りで。
町方が筋違いなら、竜の口の評定所へでも、若年寄りの御邸へで
も駆け込んでやりますよ。兵庫の野郎に腹を切らせて、あの邸に
ペンペン草を生やさなきやア、胸が治まらねえ」

浅五郎は全く真氣ほんきで言うのですから、手の付けようがありません。

「馬鹿な事を言え。お前にあんな器用なことが出来るものか、あ

れは楊弓の名人の仕業だ」

平次は相手になりません。

「親分、そんな情ねえ事を言つて貰いたくねえ。あれは紛れ^{まぐ}当りだ」

「そんなに都合よく紛れるものか」

「一生懸命になりや、俺だって、畜生ッ」

「駄目だよ浅五郎。そんな事で平次は騙せねえ。出直すが宜い」

「よし、それじゃ頼まねえ。銭形の、平次のこと言うから、もう少し判る人間かと思や、何でえ」

「帰れ帰れ」

「帰らなくってさ。これから南の御奉行所へ駆け込み訴うったえだ」

「馬鹿な事をしちやならねえ」

平次は驚いて飛出しました。入口で浅五郎を捕まえるのが精一杯。

「放してくれ、親分に用事はねえ」

「それ程まで思い詰めたのなら相談に乗ってやろう、先ず入って坐れ」

「有難てえ。それじゃ突出して下さるか、親分、やくざ者が三千五百石の大旗本を背負せおって行きやア本望だ。三尺高けえ木の上から上総房州を眺めて、浄瑠璃じょうるりを語って見せるぜ、親分」

浅五郎は少し有頂天です。

「待て待て、そんな話じゃねえ。お前を突出す代り、本当の下手人を捜して、あの邸からお町を救い出しゃ、それでよかろう——
そんな事で手をうっちゃどうだ」

「有難てえ。親分、未練なようだが、お町は泣いているぜ、助けてやっておくんない。恩に着ますよ親分」

浅五郎は涙含なみだぐんでさえおりました。

「俺には段々判って来ているんだが、あの家の人間が気に入らねえのと、とりわけ殿様の面つらが癩かさにさわるから、暫らく知らん顔をして様子を見る積りだったんだ。——お前に言われなくたって、

人身御供ごくうのお町だけは助けてやりたい。行って見ようか、八」

「親分」

ガラッ八も妙に涙っぽい眼で平次を見上げました。

七

「平次、どうだ、曲者が判ったか」

大村兵庫はまだ左の眼に繃帶ほうたいをしたまま、脇息にもたれて平次の方を見やりました。

「大方判ったような気がいたします」

「ほう、それはえらいな。——褒美の金に糸目をつけるわけではないが、お町と浅五郎は、こつちで捉つかまえたのだから、曲者がこの二人のうちなら、その方の手柄にはならぬぞ」

殿様の生摺なまずれが、又イヤな事を言います。

「お町、浅五郎に罪は御座いません」

「はて？」

「他に下手人があったとしましたら、お町浅五郎の両名はお許し下さるでしょうか」

「許し難いところだが、その方の手柄に免じて可宜いほう」

「それでは申上げます」

平次は少し居住いずまいを直しました。

縁側に坐つて、存分に春の陽を浴びておりますが、キリリとして好い男振りが、場所柄も、主人の傲慢さにも圧服される気色がありません。

平次の後ろには、お町が菊内に護られて、慎つつましく坐りました。その後にはガラツ八の八五郎、これは少し場うてがしてありますが、それでも親分の号令が掛れば、直ぐにも飛出しそうです。

「お町はいつぞや申上げた通り、あの時、私と八五郎の側を離れません。浅五郎はお町に逢つたのは真当ほんとうで御座いますが、それからズーッと、寺島新田の叔母の家におりました。長命寺境内と申

したのは遠方へ行くのはお許ゆるしがむずかしいと思つたからで御座いませう。これは間違い御座いません。それから、もう一つお町が矢を隠したのは、浅五郎に疑いのかかるのを心配した取越し苦労からで御座います」

「フム」

平次の話は依然として少しの疑いを挟む余地もなかつたのです。

「あの騒ぎの時、所在ありかの判然しないのは、この御邸の方でたつた二人御座います」

「曲者は邸内の者とどうして相判つた」

大村兵庫決して馬鹿ではありません。

「殿様の人気と申しましようか、外向そとむきの御噂はまことに宜しい方で、御所領の百姓は申すまでもなく、御朋輩ごほうばい、御同役、目付、重臣方にも申分のない評判で御座います」

「左様か」

少し御世辞になりましたが、兵庫も悪い心持はしなかつた様子です。

「それに、船の行方ゆくえを一日つけ廻した浅五郎が、自分の外にあの船を狙った者はないと申しております。若し又堤どてを通りかかった者が偶然船ひょいとの中の殿様を御見かけして、折よく持っていた楊弓で

射たと致しますと、あまり物事が都合よく纏り過ぎます。そんな廻り合せは滅多にある筈は御座いません」

「成程」

みめぐり

「すると、三囲前にお船のとまっている事を知った者が楊弓を用意して、丁度月の出前の暗い時刻を見測みはからって射たと見るのが順当で御座います」

「よく判った。ところで、あの時刻に所在不明の二人と言うのは誰と誰だ」

「申上げる前に、三人の女中を除いて、あとの方御一同、これへ御召しを願います」

平次は大村兵庫の邸にお白洲を開く積りでしょう。奥方お喜佐、弟狷之介けん、愛妾にして女中のお町、用人村川菊内、中間勝造、庭掃きの三吉爺を始め、二人の小侍、門番、——までズラリと並べました。

八

「これで宜かろう。曲者は誰だ、名指して見るが宜い」

大村兵庫は一刀を引寄せます。

恐ろしい緊張が、縁から庭に流れた。男女十数名の顔をサツと

かげらせました。

「それを申上げる前に、少しばかり、古い事を思い出して頂きとう御座います。今から十年前、格別の御目を掛けられた召使おせいという娘、不義の悪名を負わされて御手討になつた事が御座います」

「――」

「まこと眞実いいなづけは不義ではなく、おつと許嫁おつとの良夫があつたので御座います。又

三郎と言う遊び人で好い男ではあつたが、至つて向う見ずで、殿様に召された許嫁のおせいと、御邸の木戸のところで逢引してゐるところを見付けられ、おせいは一刀の下に斬られて相果て、又

三郎は逃げる背後から袈裟掛けさがけに斬られたまま大川に落ちて相果てました」

「――」

大村兵庫は痛いところに触さわられて、ムズムズしておりますが、平次の調子に淀よどみがないのと、一つも嘘が交らないので、口の出しようがありません。

「――いや、死んだと思われて、その実人に助けられ、傷養生をして丈夫になったので御座います。又三郎は袈裟掛に斬られたに相違ありませんが、刀尖きつさきが伸びなかつたので、背中を斜ななめに一尺も割かれ、大変な出血で、暫らくは命が助かってもし起き上る力もな

かったことで御座いましょう。でも、取って三十の又三郎は、どうやらこうやら起き出すと、そのまま上方へ飛んで、知り人の金で本式の結改場けっかいば（矢場）を開きました」

「――」

一座は矢場と聞いてザワザワとなりました。

「それから十年、商売の楊弓を稽古してしつかり磨き、京に幾人という名人になった又三郎は、名と姿を変えてこの御屋敷に入り込み、殿様に怨うらみを酬むくいる折を狙ったので御座います。江戸の楊弓番附をどんなに調べても、殿様に怨みを持つ者のなかつたのはそのわけで御座います」

「誰だ、その曲者は」

大村兵庫はたった一つの眼を光らせて見廻しました。四十前後
と言うと、村川菊内、中間勝造、それに二人の小侍がありますが、
いずれも曲者らしくはありません。

「あの時所在ありかの判らなかつた二人のうちの一人で御座います」
「誰だ、それは」

「一人は狷之介様、——しかしこれは又三郎にしては若過ぎます」
「——」

狷之介は黙つてうつむきました。何にかやましい事があつたの
でしよう。

「奥方の御憤りおいきどおを思いやられるのは、御姉弟の情として御もつともですが、曲者を御見逃しになったのは御手落ちで御座いました

——

「それは真実ほんとうか、狷之介殿」

兵庫の一つの眼はギラリと光ります。

「もつとも、なまじ曲者を捉え、これが表沙汰になっては、反つて御家の瑕瑾きずになると覚し召された事でしょう。下賤の者に楊弓

で眼を射られたと知れては、御身分かかわに拘りましょう。狷之介様の

遊ばされ方は、御褒めになつて宜しいかと存じます。もつとも、

お町を憎しみの余り浅五郎に罪を被きせようとなすつたのは面白

くありませんが——」

「フーム」

上げたり下げたりです。

が、兵庫はこれで堪能し、狷之介はすっかり油を絞られた形です。

「ところで曲者は？」

重ねて問う兵庫には答えず、平次は庭の方へ向直りました。

「又三郎、背中の傷痕きずあとを見せて上げな」

「へエ」

何と言う事。

素直な返事をしたのは、五十七八、六十近い老人と見えた、庭掃きの三吉だったのです。

「真っ平御免ねえ」

パツと肌脱になつて後ろを向くと、頸筋から背中へかけて、斜一文字に、物凄ふるきずい古傷の痕。

「己れッ、不届な奴」

一刀を提げて大村兵庫は立ち上りました。続いて、村川菊内も、二人の小侍も――。

「御待ち下さい。表沙汰にすると、家名に拘わりますぞ。狷之介様、殿様を御留め下さい」

平次と狷之介とガラツ八が一生懸命宥なだめているうちに、柄に似ぬ軽捷な三吉の又三郎は、二、三つ跳んで、木戸から路地へ、往来へと逃げ去ってしまいました。

「逃がしてはならぬ、それ追えッ」

と兵庫、縁側から庭へ、足袋はだし蹴足で飛降ります。

「殿様、それはなりません。あれは一度斬られて死んだ男の幽霊で御座います。強たつて捉まえても成敗のいたしようがありません。

公儀のお耳に入れば、あの男の命一つと、三千五百石の御家が釣り替になった上、一つ間違えば殿様の腹切道具になります」

平次は木戸に突っ立って、両手を拡げて押し止めました。

「殿、穩便の御沙汰を願います」

「邸外への聞えも如何、平ひらに御鎮まりを」

村川菊内外一同、寄つてたかつて兵庫を座敷へ押上げてしまひました。

×

×

「どうだ八、溜飲りゅういんが下がつたらう」

「その代り褒美はフイになつたぜ、親分」

「欲張るな、三吉を逃した上、お町さんを貰つて来たんだ。なあ、浅五郎が神田の家で待っているぜ」

平次はそう言いながら、後ろからイソイソと従いて来るお町を

顧みました。

「狷之介が曲者を見たとどうして解ったんで、親分」

「相変らず絵解きか。あの晩三囲みめぐりの前で船の騒ぎを面白そうに見ていたからさ——投げ槍か、刀、鉄砲でやられたのなら、狷之介に相違ないと思うところだが、曲者は楊弓の名人と解っているから迷ったよ」

「三吉が曲者と解ったわけは」

「船のいる場所を知って、楊弓を用意して来る隙のあるのは三吉だけさ」

「それにしても酒を持って船で来た筈だが——」

「それが詭計だよ。往きは渡船で行って、帰りに知合いの船頭に頼んで船に乗せて貰ったと言うのが可怪しいと思わなかつたかい。——あれは、船頭を一人仲間に引入れて、少し下手の土手に着けさせ、そつと登つて、堤伝いに船の上へ行くと、狙いを定めて矢を射たのさ、——当つたと見ると、継弓を畳んで元の場所へ引返し、船を中流まで出して、宜い加減のところから漕ぎ戻らせ、今向う岸から来たような顔をしたのだろう。船から船へ乗移つたのが疑わせない手だよ」

「どうしてそれが解つたんで、親分は？」

「楊弓の名人は、どんなに道具を大事にするか知つてるだろう。」

紫檀したんの継弓を捨てる位なら、自分の身体を隅田川へ捨て兼ねない

よ。——俺はそう気がついたから、村川の旦那に頼んで、そつと

三吉の荷物を捜さしたのさ。三吉もそれを察したらしいが、あわよくば三千五百石の殿様を抱いて自首する積りで、逃げも隠れもしなかったのだよ。それにあの男は風呂へ入るところを人に見られるのをひどく嫌っていたそうだ。背中せなかの傷痕があるからだ」

「又三郎は四十そこそこじゃありませんか、三吉はどう見ても五十七八、六十位に見えるが」

「大怪我で精氣せいぎを費い尽したのだろう。それに人の三倍も五倍も苦勞をした。その上少し顔へ細工をして、年よりは十七八老けて

見えるようになったから、平気であの屋敷へ入ったのさ。生れは上総の知行所だから、住込むとなると、わけはなかつたろう」

「変な仕事だったネ、親分」

「笹野の旦那には叱られるだろうが、宜い心持さ。岡っ引もこれだから満更じゃねえよ」

人を縛らない時は、本当に朗らかな平次ほがだったのです。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

本編の初出時の表題は「大村兵庫の眼玉」です。

初出――「オール讀物」昭和十年五月号　文藝春秋社

底本――「錢形平次捕物全集」第二卷　河出書房　昭和三十一年五月三十一日初版

編集・発行　錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>